



文化学園リポジトリ

Academic Repository of BUNKA GAKUEN

服飾文化共同研究拠点／文化ファッション研究機構

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture / Bunka Fashion Research Institute

文化学園大学

Bunka Gakuen University

文化服装学院

Bunka Fashion College

文化ファッション大学院大学

Bunka Fashion Graduate University

文化外国語専門学校

Bunka Institute of Language

Title	W. ブッシュの"マックスとモーリッツ"七つのいたずらについての一考察
Author(s)	西岡, 万里子
Citation	研究紀要 19 (1988-01) pp.287-297
Issue Date	1988-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10457/2386
Rights	

W. ブッシュの “マックスとモーリッツ” 七つのいたずらについての一考察

西岡 万里子*

Eine Betrachtung über “Max und Moritz” eine Bubengeschichte in sieben Streichen von Wilhelm Busch

Mariko Nishioka

I

本学紀要18号で取りあげたH. ホフマンの「もじゃもじゃペーター」が出版されてから、20年後に現われた類似的作風のヴィルヘルム・ブッシュ (Wilhelm Busch 1832~1908) の「マックスとモーリッツ、七つのいたずら Max und Moritz, eine Bubengeschichte in sieben Streichen」(1865)を、今回もその内容を心理学的な観点から考察してみる。

W. ブッシュは、ハノファーの近くのヴィーデンザールで生まれ、9歳の時父親の意向で高等教育を受けるため母方の牧師の叔父に預けられ、工業学校に進学したが、強い絵画志望で美術学校に転学し、オランダやミュンヘン等で学んだ。そして、カスベル・ブラウン (Kasper Braun) が1844年から主宰している諧謔的風刺的な週刊誌「フリーゲンデ・ブレッター Fliegende Blätter」があったが、その雑誌に1859年にブッシュの最初の絵が載り、その後1871年までに136回に亙り掲載されている。また1859年に、ブラウン・ウント・シュナイダー

社から出版されていたミュンヘン一枚絵 (Münchener Bilderbogen 1849~1898) に、「小さなはちみつどろぼうたち Die Kleinen Honigdiebe」が載る。以後1871年までに絵物語60余編を描き、幾編かは単行本としても刊行した。

代表作として次の作品が挙げられる。それは、「絵のいたずら Bildposse」(1864), 「ハンス・フッケンバイン Hans Huckenbein」(1867), 「聖アントーニウス Der Heilige Antonius」(1870), 「敬虔なヘレーネ Die Fromme Helene」(1872), 「でぶちびクノップ三部作 knopp-Trilogie」(1875), 「エドゥアルトの夢 Eduards Traum」(1891), 「蝶々 Der Schmetterling」(1895), 「心の批判 Kritik des Herzens」(1874) などである。

彼は文章の説明をできる限り少なくし、そのかわりに絵で表現する絵物語を創作した。それは漫画の先駆とも言われ、行動的で劇的な絵を伴う、簡潔で韻を踏んだ警詩句で構成されている。外観的には社会秩序を守らなくてはならないとしながらも、現実には見せかけだけで偏狭な社会に対して、痛烈な批判を含むものである。当時、1848年の革命の敗北によって、ドイツ中産階層の間に失望感が高まり、人々はそれ

* 本学助手 外国語研究室

までのヘーゲルの合理主義哲学から、自己の内面の世界を見つめはじめた時、アルトゥール・ショーペンハウエル (Arthur Schopenhauer 1788~1860) が「意志と表象としての世界 Die Welt als Wille und Vorstellung」(1818, 第二巻1844) で反理想主義のペシミズムに基づいた哲学を説き、これが50年代に中産階層の心を広範に捉えて流行したが、ブッシュもそうした影響を受けたひとりであった。

彼は、従来の画一的な教育のための絵本や、上品でおとなしく、牧歌的な子どもの本の世界に辛辣な風刺詩画(漫画)を登場させた。

II

考察を進めるために必要と思われる全訳を試みたい。

まえがき

ああ、なんとしばしば いたずらっ子のことを聞いたり 読んだり するのだろうか!!
たとえば マックスとモーリッツという子のように、賢い教を聞いて よい子になるかわりに、たびたび そんな教を笑ったり、隠れておどけたことをやったんだ。—
—そうさ、いたずらの用意はできている! —
—人をからかい、動物をいじめ、リンゴ、洋ナシ、プラムを盗む—
なんてことは もちろん面白いし その上 とってもらくちなんだ。教会や学校で きちんと椅子にすわっているよりも。—
—ところが なんと いたましい! 二人の終りを見るならば!! —
—ああ、ひどいものだった、マックスやモーリッツのようになったなら。
—だから、二人のしたことを、絵と話にして書いてみよう。

最初のいたずら 図1

鶏を飼うのに いろいろ ほねおるけれど、
第一に 鳥の生む 卵のためでも あるし、

第二に 時おり 鳥の丸焼きが 食べられる。
第三に 羽だって 枕や布団に 使えるのさ、
冷たい寝床が いやならね。

ごらんなさい、ここにいる ボルテ未亡人も
やはり 寒さが嫌い。

それで 三羽の雌鳥と 一羽の立派な雄鳥を
飼っていた。—

マックスとモーリッツは 考えた。何かいたずら
できないか? —

—素早く、いち、にい、さん、パンを二つに切
ってから、それを小指の大きさに 四つにし、
十字に結んだ ひもの先にしばりつけ、それから
ボルテ未亡人の庭に おいておく。—
早速 パンを見つけた雄鳥が、声高らかに
コケッコォー! コケッコォー!! —タッタ
ッタ! —雌鳥たちが やってくる。

鶏たちは 勢いよく 一切れずつ のみ込んだ。
しかし 四羽が気が付くと 離れられなくな
っていた。

あっちこっち 行ったり来たり 引っぱりあ
い、羽を バタバタさせたり 高く跳び上が
ったり。ああ これは大変!

ああ、長い枯枝に ひっかかってしまった。—
—そして 首が だんだん長くなり、鳴き声も
だんだん 細くなる。それぞれ 大急ぎ 卵を
一つずつ 生んでから、死が やってきた。—
ボルテ未亡人 部屋のベッドで 悲しそうな声
を聞き、胸さわぎで 出てきたよ。

ああ、なんと恐ろしいこと!

「泣けてくる! 全ての私の望み、憧れ、生涯
の一番素敵な夢が リンゴの木で 首を吊るな
んて!!」

深い悲しみ 心も重く ナイフを取って来て、
いつまでも ぶら下っている 死んだ鶏を
糸から 切り離す。悲しい光景に 無言で
家に入っていく。—

これが最初のいたずらで、二つめのいたずらが
すぐ続く。

二つめのいたずら 図2

人の良いボルテ未亡人 悲しみから 立ち直る

と 一番いいこと あれこれ考えた。この世でこんなに早く 死んでしまった鶏たちを、静かに 手厚く こんがり焼いて 食べてしましましょうと。—

—もちろん 悲しみは深い、羽をむしられてはだかになった鳥たちが かまどに おかれていた。かつては 楽しい日々を ある時は裏庭で、またある時は 草花の中で 元気に 砂かきをしていたものを。—

ああ、ボルテおばさん また涙、スピッツもそばに 立ちつくす。マックスとモーリッツはにおいをかぎつけ、「いそげ そっと忍び足で屋根へ 登るんだ！」と言うことさ。

二人は 大喜び 煙突から 鶏が並んでいるのが見えるんだ。鳥は もう頭と首を落されてこんがりと フライパンで 焼けている。—

—ちょうどその時 ボルテ未亡人 お皿を持って地下室へ 酢キャベツを 取りに行く。温めた酢キャベツは おばさんの大好物。—

—そうこうするうち 屋根の上では一心不乱。マックスは もう 計画的に 釣竿一本 持ってきていた。—

ピューン！ 上から もう 一羽め吊り上げる。ピューン！ 今度は もう 二羽め

ピューン！ 今度は もう 三羽め、今度は もう 四羽めだ。ピューン！ 手に入れた！！

—

スピッツは その時 それを見ていて ワンワン！ ワンワン！ 吠えたけど、

二人は もう 元気よく 屋根から 下りて 逃げていく。—

—さあ！ これは ひと騒動起きるぞ、ボルテおばさんが たった今 戻ってきたから、フライパンを見て ただ 呆然と 立ちつくす。鶏が全部 なくなっている—「スピッツめ！！」

—これが 最初の一言だ。—

「まあ、スピッツ だろぼうめ！！ お待ち！

こらしめてやるから！！！」

大きくて重たいスプーンを スピッツ めがけて 振り上げる。犬は 悲鳴をあげる。だって 自分は 悪くはないんだもの。—

—マックスとモーリッツは 隠れ家の中 塀のそばで 高いびき、鶏のすごい御馳走も ももが 一本ずつ 見えるだけ。

これが二つめのいたずらで、三つめのいたずらが すぐ続く。

三つめのいたずら 図3

村の人は だれでも ベックさんのことを知っている。—

ふだん着、外出着、長ズボン、エンビ服、便利なポケットつきのベスト、暖かいコート、スパッツ— 着るもの なんでも 仕立屋ベックが作ることを 知っている。

その他に 繕ったり、丈を詰めたり、つぎを当てたり、それに スポンのボタンが とれたりゆるくなったもの— いつでも どこでも

なんでも 前でも 後でも 同じこと— 全部 ベック親方は できちゃうんだ。それが彼のいきがいなさ。—

—だから 村のみんなに 好かれている。—
—しかし マックスとモーリッツは どうやって ベックさんを 怒らせるかを 考える。— 親方の家の前を 川が ゴウゴウ 水音たてて流れてる。

川の上に 小橋が 渡してあり その上に 道が通っていた。—

マックスとモーリッツ、大急ぎで、そおっとのこぎりをひく、ギコギコ！ ひどい悪だくみ、橋に切れ目を入れるとは。—

切り終ると 突然大声で「ここまでおいで！ ベック出てこい！ 仕立屋、仕立屋、メエー、メエー、メエー！！」

—ベックさん 黙って 我慢をしていたが、こうまで言われて 気が済まぬ。

急いで 物差し持って 敷居を飛び越えると、またまた 驚いたことに 大声で「メエ、メエ、メエ！！」

仕立屋ベックが 橋に乗ったら パリッ！

橋は真二つに 折れる。また「メエー、メエー、メエー！」と はやす声

ザブン！ その時 仕立屋は 消えちゃった！

丁度 そこへ ガチョウの夫婦が 泳いでくる。ベックさん 死にもものぐるいで 足をしっかりと つかむ。
 つかまった 二羽のガチョウ バタバタ飛んで陸の上へ。—
 助かったけれども ちっとも よくなかった。この一件のベックさん 今度は 胃痛がおきる。ベック夫人は 大いに たたえられる！ 熱いアイロンを、冷えたお腹に のせたから、もとのように 良くなった。—
 一間もなく 村じゅうで 言われてる ベックさん また 元気になったよ！ と
 これが三つめのいたずらで、四つめのいたずらが すぐ続く。

四つめのいたずら 図4

つまり 人間は いろいろ 学ばなければならない 決まりが あるんだ。—
 —ABC だけでは 人間は 高い境地に 進めない、読み書きだけを 賢明に 習うものでもない、人間は 計算ばかり 頑張っても だめなんだ、その他に 英知の教えも 喜んで聞くことだ。—
 このことを よくわきまえたのが ここにいる レムベル先生だ。—
 —マックスとモーリッツの二人は 先生を 好きになれない。悪さをする者 先生を 気にしちゃいられない。—
 さて このおとなしい先生は 大のたばこ好き、一生懸命 骨をおった 一日の終りに 善良な老人が ふかす一服 皆 むろん 心から喜んで 認めている。
 —マックスとモーリッツ あきもせず いたずらを 考える。パイプを使って やっつけられないかを。—
 —ある日曜日のこと おとなしくて 正直なレムベル先生 教会で オルガンを 感情こめて 弾いていた。いたずら小僧は こっそりと先生の家の パイプのある室に 忍び込み、マックスが パイプを持ち モーリッツが ポケットから 火薬ビンを取り出し 素早く サッ

サッサッ！ 火薬を パイプに 詰める。—
 —丁度その頃 レムベル先生 心安らかに 教会の戸に鍵をかける。本と楽譜を こわきにはさみ、仕事を終えて 先生は うれしげに 気楽なわが家へ 歩を向ける。そして 心から感謝して パイプに 火をつける。
 「あーあ！」—つぶやく—「満足こそ 一番大きな喜びだ!!」
 バーン!!—その時 パイプが 大きい音で爆発、とても恐ろしいことだ。
 コーヒーポット、ガラスコップ、タバコのカン、インクつぼ、ストーブ、机、安楽椅子も何もかも 火花とともに ふっとんだ。—
 煙が ようやく おさまって 先生を見ると、ありがたい！ 倒れていたが 生きていた。
 しかし 何か 様子がおかしい。
 鼻、手、顔、耳も 黒んぼみたいに 真黒だ。そして 髪の毛は 根元まで すっかり 焼け落ちた。—
 だれが いったい 子どもたちに 教えたり 知識をつけたり するのかな？
 だれが いったい 先生の代わりに 務をするのかな？
 パイプが 壊れてつかえないなら、先生は 何で タバコを すえばいいのだ？
 時が 全てを 解決しても パイプだけは 壊れたまま。
 これが四つめのいたずらで、五つめのいたずらが すぐ続く。

五つめのいたずら 図5

村でも町でも おじさんと 住んでいる者は 礼儀正しく おとなしくするものだ。それが おじさんは お気に入り。—
 毎朝「おはようございます！ 何かご用は ありますか？」
 おじさんが 必要とするもの 新聞、パイプ、火つけこより なんでも とってくる。—
 その他 背中をもんだり かゆいとか チクチクする所を すぐに 喜んで かいがいしく世話を してあげる。—

また おじさんが かぎタバコ ひとつまみ
かいで 激しく くしゃみを するときは、
「気をつけて！」と言うと、すぐに「ありがと
う きみたちも！」—
それから おじさんが 遅く 家に帰った時、
長ぐつを 脱がしてあげたり、スパッツ ガウ
ン、帽子を 寒くないように 持ってくる。—
つまり おじさんが 喜ぶことを 考えるも
の。—
—マックスとモーリッツは そんなこと ぜん
ぜんする気はない。—
—考えてごらん、彼等が フリッツおじさんに
どんな悪さをしたか！—
コガネ虫は 小鳥に かけがえのないものと
だれでも 知っている。
枝の間を あちこちと 飛んだり はったり
ゴソゴソしている。
マックスとモーリッツは 元気よく 木をゆす
り 虫を落す。
ゴソゴソはう虫を 紙袋に 閉じこめる。—
その袋を フリッツおじさんの 掛け布団の下
の すみっこに置く!!!
間もなく フリッツおじさん とんがり帽子を
かぶり ベッドへ やってくる。目を閉じ、布
団にくるまり 静かに 眠る。
ところが 虫たち ゴソ、ゴソ！ 素早く
布団から はいだした。
すでに 一匹が おじさんの鼻を ひとはさ
み。「キャー!!」大声で—「これは なんだ？」
と虫をつかむ。
おじさんは 虫を見て びっくりぎょうてん。
「あっ痛!!」—虫は もうまた 首筋や足に、
あちらこちらと はいまわったり、ブンブン飛
びまわる。
フリッツおじさん せっぱつまって ひっぱた
いたり 踏みつぶしたり 一匹残らず 片づけ
た。やれやれ！ これで このうるさい虫たち
も おしまいだ！
フリッツおじさん 静かになったので
目をつぶる。
これが五つめのいたずらで、六つめのいたずら

が すぐ続く。

六つめのいたずら 図6

楽しい 復活祭には、信心深い パン屋さん
たくさんの 甘いおかしを 焼いたり 準備を
したり、マックスとモーリッツも そんな物が
ほしくて たまらない。—
しかし パン屋さん しっかり パン工場に
鍵をかけた。
そこで、盗むなら 煙突から 入るしかない。
ガリガリ!!— 二人は カラスのように 真
黒になって 煙突から やって来た。
ドスン!— 小麦粉の入った 木箱の中へ お
っこちた。
あら！ 二人とも 全身 チョークのように
真白だ。それでも 二人は 8の字パンが
おいてあるのをみて 大喜び。
ガタッ!!—その時 椅子が 真二つに壊れ
た。パチャ!!—二人は ドロドロの粉の中。
全身 ケーキのもとに くるまれて あわれな
格好で 立っていた。—
すぐ パン屋の親方 現われて その様子に
気がついた。
いち にい さん！—あっという間に 二つ
のパンが 出来上がり。
パン焼き釜の中は まだ熱い— ポーン!!!—
パン皮にくるまれた 二人を オープンの中
へ！ よいしょ!! と 取り出した、こんが
り うまく焼けたから。—
もうおしまいかと思ったら！
いやいや！—二人は まだ 生きている！
バリバリ、ポリポリ！—ねずみのように 外
側のパンを かじってる。
パン屋の親方 大声で「あッウァー！ 二人が
逃げてゆく!!」
これが六つめのいたずらで、七つめのいたずら
が すぐ続く。

七つめのいたずら 図7

マックスとモーリッツ ああ おまえたち！
これが 最後のいたずらさ！—

また二人は なんのために 袋に 穴をあけるのだ?—
ごらんなさい、ここにいる 百姓のメッケさん 小麦の袋を かついでる。—
しかし メッケさん 一歩も いかぬまに 袋の麦が こぼれ出す。
びっくりして 立ち止まり つぶやいた「あれ! 軽くなる!」
ウワ! メッケさん 麦の中の 二人を 見つけて 大喜び。
それ!!—大きな袋に いたずら小僧を シャベルで すくい入れる。
マックスとモーリッツは 気がきじゃない。だって今 粉屋に向かっている。—
「粉屋の親方 お願いだ! これを 急いで 挽いてくれ!」
「こっちへ そいつを!!」粉屋は いたずら小僧を じょうごに ゆさぶり入れる。
ガタガタ! ゴトゴト! 水車は 音をたててまわっている。
二人の姿は 細かく挽かれ 粒になってもまだ わかる。

ところが すぐに 粉屋のアヒルが 二人をバクバク食べた。

終りに

このことが 村じゅうに 知れたけど、悲しむ者は いなかった。
穏やかで 優しい ポルテ未亡人、「ごらん 思ったとおりだよ!」と
「そう、そう、そうだ!」—ベック親方が 大声で、「いたずらを 生きがいに するからさ!」続いて、レムベル先生「これはまた いい見せしめですな!」と
「そうとも」と パン屋さん、「なんで 人間はこんなに くいしんぼうなんだろう!」
人のいいフリッツおじさんも「悪い冗談をしたからだ!」と 言っている。
ところが おとなしいメッケさん「それが 私に 何の関係があるのだ?!」と 思っている。
つまり その辺全体で うれしそうに ささやかれた。「やれやれ! これで いたずら騒ぎも おしまいだ!!!」

図1

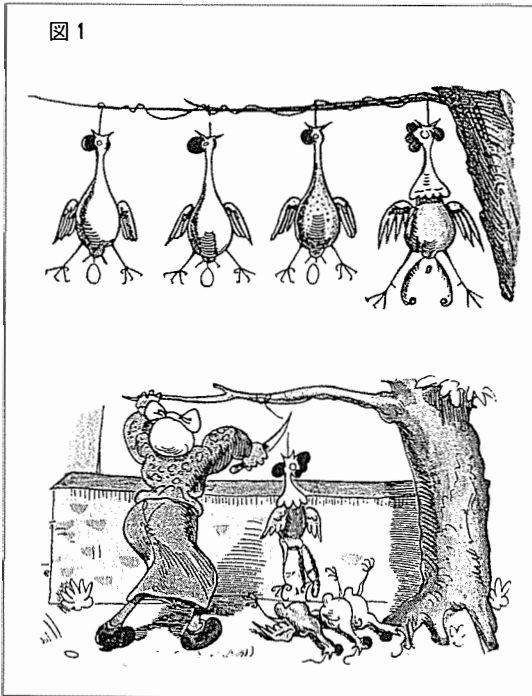


図2



図 3

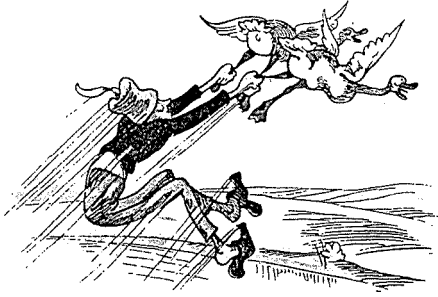


図 4



図 5

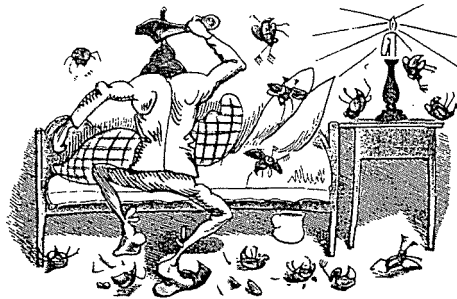
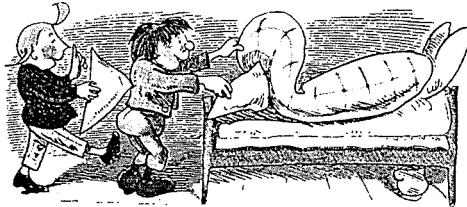


図 6

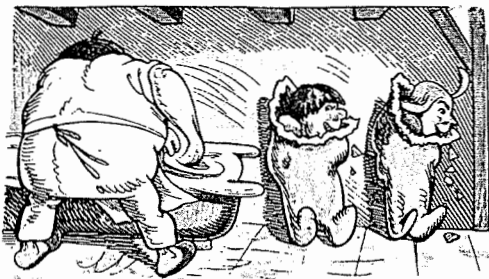
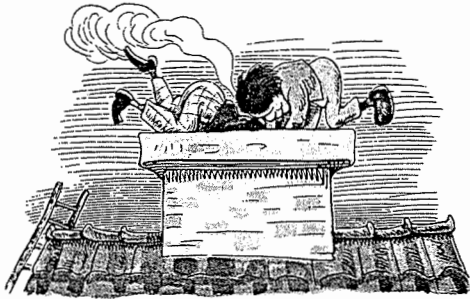
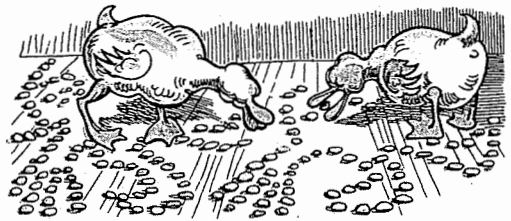
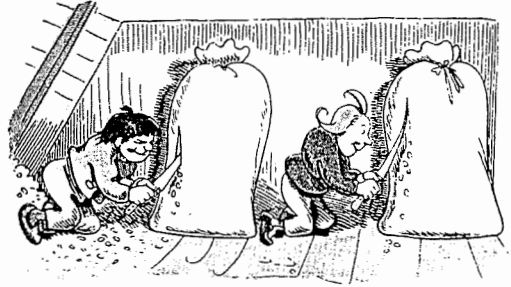


図 7



(J. F. Schreiber 版より抜粋)

III

この絵本は「子ども」と「おとな」の両方のイニシエーションを扱ったものと言える。以下、C. G. ユングの心理学を手がかりに、各話について、その心理学的意味を考察してみたい。

一般にユングによれば、英雄神話には、四段階の周期（第一段階《トリックスター》、第二段階《うさぎ》、第三段階《赤い角》、第四段階《双生児》）がある。ホフマンの「もじゃもじゃペーター」では、トリックスターの周期が扱われており、幼児後期から児童期への変容を表わしたが、「マックスとモーリッツ」では、第二段階の《うさぎ》の周期（トリックスターの幼児的欲求が修正され、社会的存在になりつつある状態）が扱われ、児童期から青年期への変容が象徴的に表現されている。

英雄のマックスとモーリッツは、七つの悪戯を行なうが、最初から第五までの悪戯は、熟考された悪戯という行為（イニシエーションの儀式）により、「おとな（男女）」をより良き個性化（内的、主観的な統合過程と客観的な対人関係の過程）へ向けて成熟を促す。しかし第六と第七の悪戯では、自分達自身が現段階から次段階への移行を可能にするためのイニシエーションの儀式——死と再生——を体験させられる。

最初の悪戯では、鶏を殺すという行為が、日頃の平穩無事な生活に浸りきっていたボルテ未亡人の内面に訴えかける契機となり、彼女の意識の高揚へとつながる。また、彼女はリンゴの枯枝に引っ掛っている死んだ鶏を、ナイフで切り離すが、鶏は彼女自身の象徴でもあり、現段階からの離脱を促すものである。死ぬ間際に雌鳥が卵を生むが、有精卵であろう卵は再生を象徴する。リンゴの木は人間の幸福、生の喜びを表わすが、枯枝なので直接には幸福につながらないという暗示であり、次の話に継続する。

第二の悪戯においては前の悪戯を受ける。ボ

ルテお婆さんは、鶏の死を悲しんでばかりもいられないので、それを焼鳥にしてザワークラウトを添えて食べるはずであったが、寸暇に英雄達に取られてしまう。お婆さんのそばに居る犬は彼女の影（無意識）の投影である。彼女は否定的なアニムス（無意識の人格化されたものとしての男性像）の影響を受け、残酷で感情的である。客観的に判断すれば、犬が四羽もの焼きたての鳥を周囲を汚さずに一片残らず食べられるはずがない。英雄達に焼き鳥を食べられ、自身も犬を打つという錯誤を犯してしまいが、これは自分自身に対しての否定的なアニムスを覚醒させ、それを意識化へ導き、より良い個性化に向かわせるための儀式と見なされる。

第三の悪戯では、仕立屋が登場するが、これは半人前の人間、臆病者を象徴する。英雄達は彼を川に入水させるが、これは彼の無意識を浄化させるためである。そして、彼は幸運なことに直ぐ、母性、創造、豊饒、太陽を表わす二羽のガチョウに助けられる。しかし腹痛がおきるが、これによって忍耐や良心の呵責を持つことを学ばせられる。そしてこの痛みを、グレートマザー（太母、育む母）であるおかみさんが、熱いアイロンを腹に当て、愛情と慈悲で暖めて治してくれる。この入水体験（イニシエーションの儀式）を経たことで、彼は現段階での成熟をみたのである。

第四の悪戯に登場するレムペル先生は、お説教をし、知識人でもあるが、常に真面目で模範的な生活をしなければならないというペルソナ（外面的顔）の強い影響を受けている。そこで、意識に対する無意識の補償作用が生じ、葛藤が現れる。それ故感情的爆発が必要であるが、先生自からそうした行動にでることは、社会的状況からみて不可能である。そのために、英雄たちが機縁を作ることになる。すなわち彼等は、パイプに火薬を詰め、爆発というイニシエーションの儀式を取り行なうのである。鼻、手、顔、耳が真黒になったが、これは感覚機能、つ

まり感性に新しい活力を生じさせたことを表わし、髪が根本まで焼けおちたことは浄化できたことを象徴する。そして時間が全てのものを元どおりにしたが、パイプは壊れたままであった。これは打破されたレムベル先生のペルソナの象徴であり、彼が次段階へ上昇したことを意味する。

第五の悪戯では、二人はフリッツおじさんの安眠を妨げる。彼はいつも皆から大事にされ、無意識を眠らせたままにいる。そこで英雄達はその事に気付かせるために、虫というたくらみの象徴をベッドに隠し、眠りから目ざめさせる。虫を退治させる行為は、無意識を意識化させ、自己の統合を促す象徴と見なされる。一匹残らず退治して再度眠りにつくことができたが、これは現段階での統合の成果を表わす。

第六の悪戯で、いよいよ英雄達は今までの種類の行為に対して機が熟し、次の段階へ導かれるための準備期に入る。パン屋の親方が鍵をしっかりとかけているので、煙突からしかその中へ入ることができない。この狭い通路のイメージは、今まで彼等が発散していたエネルギーを集中させ、内面の凝視が課せられることを意味する。体全体が煙突の煤まみれになるが、落ちた所は麦粉の中で、今度は真白になる。黒や灰は豊饒や活力を生み出すことの象徴であり、白は無意識や直感を意味し、無意識が喚起、啓示される。そして棚にあるパンを取ろうとする行為は、向上への意欲の萌芽を意味し、さらに、もう一度ドウで全身を覆われて内面を熟視させられ、そのうえ釜の余熱の穏やかな外的エネルギーで高揚を促される。しかし時期早尚だったようで、彼等はまだ次の段階に到達できない。また、パン屋の親方は、自分の家に忍び込んだ二人を掴まえて、懲らしめようとしたが逃げられてしまった。すなわちパン屋の親方は二人をもう一步のところまで次段階へ導くことができなかったのであるが、彼は英雄達を助けるための一段階上の英雄、つまり英雄像の第三段階《赤い

角》(曖昧な人物であるが英雄の資格を満たす)の象徴であろう。

第七の悪戯は、完成段階を象徴する七の数が見すように、最後の悪戯となる。二人は百姓メッケの麦袋に穴を開けるために、ナイフを用いたことは、ナイフは切るもの、切り落すものであり、彼等自身が現段階から脱却しようとしていることを表わす。そして百姓メッケは悪戯をされるが、しっかりと二人を掴まえ粉屋に引き渡し、この百姓と粉屋の二人が協力してマックスとモーリッツの英雄達を次段階に導くが、彼等は英雄達を助けるための最上段階の英雄、つまり英雄像の第四段階《双生児》(太陽の子と呼ばれ、一方が内向的、他方が外向的で双方が補い合わされて本領を発揮する)の象徴であろう。この英雄達から彼等はイニシエーションの儀式(粉のように挽かれる)を執行してもらおう。粉に挽かれても、まだ二人の姿が判るが、すぐさま粉屋に飼われているアヒルに食べられる。これは児童期の完了を意味し、アヒルの体内で成熟し、新たに生まれ得るという、死と再生の象徴である。最初の悪戯で鶏が死ぬ間際に卵を生んでいるが、それはマックスとモーリッツが新しく生まれ変わる「再生」を予示していた。

以上見てきたが、この絵本は、子どもが悪戯をとおして、おとなの虚栄や弱点を容赦なく笑い、悪戯の進行とともに偽善的で偏狭なおとなたちの自己満足を浮き彫りにしていく。また、子どものあくどい悪戯を、諸手をあげて認めているわけではなく、おとなと子ども双方の変容を促している。しかしブッシュもホフマンと同様に、年齢に相応する行為を許容してもいる。おとなの言いつけを厳格に守り、自我の発達を抑圧された場合、人生の半ば辺りでそれを補償する作用が表われるということを、彼は訴えたかったのではないだろうか。

擬音効果と韻を踏んだ詩は、リズムカルで覚えやすく、ユーモラスで明快な絵とともに親しみやすい。また、自分にはできない行動を代行

W. ブッシュの“マックスとモーリッツ”七つのいたずらについての一考察

してくれる壮快感が大衆の支持を得、現在でも多くの人びとに愛読されている。彼の多数の作品のうち一番人気があったこの作品を、ブッシュは33歳の時に描いているが、彼自身にとってもこの絵本が自己の個性化を促進し、再生への導入の契機になったのではないだろうか。

参 考 文 献

- 1) ハイッツ・ヴェーゲハウプト「ドイツ国立図書館における児童図書収集の歴史」、『複製世界の絵本館、ベルリン・コレクション解説』、ほるぶ社、1983
- 2) ベッティナ・ヒューリマン著、野村滋訳、『子どもの本の世界/300年の歩み』、福音館書店、1981
- 3) Klaus Doderer/Helmut Müller, *Das Bilderbuch* BELTZ, 1973
- 4) アルノルド・ヴァレ・ジェネップ著、秋山さと子他訳、『通過儀礼』、思索社、1985
- 5) C. G. ユング他著、河合隼雄監訳、『人間と象徴』、上下巻、河出書房新社、1984
- 6) 樋口和彦、『ユング心理学の世界』、創元社、1984
- 7) C. G. ユング著、野村美紀子訳、『変容の象徴』、築摩書房、1985
- 8) 秋山さと子編、『ユングの象徴論』、思索社、1981
- 9) アト・ドフリース著、山下主一郎他共訳、『イメージ・シンボル事典』、大修館、1984
- 10) J. ヘンダーソン著、河合隼雄、浪花博訳『夢と神話の世界』、新泉社、1985
- 11) フリッツ・マルティニ著、高木実他共訳、『ドイツ文学史、現初から現代まで』、三修社、1984
- 12) F. G. ウィックス著、秋山さと子、國分久子訳、『子ども時代の内的世界』、海鳴社、1984
- 13) M-L・フォン・フランツ著、氏原寛訳、『おとぎ話における影』、人文書院、1987
- 14) 山中康裕著、『絵本と童話のユング心理学』大阪書籍、1986
- 15) 山崎正一著、『西洋近世哲学史(三) —19世紀から現代まで—』、岩波全書、1983